

月刊

# いっしょのとも

第三卷

二月号

## 宗教は阿片か

宗教は

阿片か

それとも

一杯のビールか

自らを

ひとときの間でも

気分よくしてくれる

清涼剤なのか

それとも

頭で知るだけで

気分がよくなる

頭痛薬なのか

逆に

苦しみを忘れさせて

墮落を許してくれる

劇薬なのか

多くの人にとって

宗教とは

一体

何なんだろう

## 執らわれの気付き

執らわれの

ある人ほどが

自らの

力のなさも

気付くことなし

## ひとりで悩みたくない人は

一、人には「布施」の心で接すること。

今年も表題の十ヶ条を、毎月、十一月号まで一条ずつ解説をして行きたいと思えます。

ここで「布施」と言いますのは、歌手のお名前ではありません。これは、仏教の言葉なのです。これまでこの「ころのとも」を続けてお読み頂いた方は、勿論、お分かりの通りです。

冗談はさておき、既にこの言葉は、本誌にも何度か出て来ました。バックナンバーをお持ちの方のために、目に付いたものを挙げておきますと、第一巻二月号と第二巻八月号です。それぞれ少し解説いたしております。お持ちの方はご参考までに、お目通し下さい。

さて、本題の布施ですが、一般にはお布施と言って、お寺の坊さんに檀家の人が施すお金や物のことを言います。今は施すというより、寺から「檀家割当の寄附金」を言われたり、葬式や法事の後でその「僧侶労賃に対する請求書」が来たりして、徴収されるといった感じに変わっています。信仰とは無関係にお金を支払わされています。でも、本来は信者の僧侶にたいする信仰のあかしとして、施すものであり、どこまでも任意で自主的なも

のです。それが江戸時代以来の檀家の固定化に伴って、多くの坊主が葬式屋に成り下がり、死者の霊ばかりに関わりだしました。生きている人の幸せを願うのが、宗教の真の意味であるにもかかわらず、そちらの方は、殆どを新興宗教に任せてしまっています。嘆かわしい限りだと言わねばなりません。

このように、今の檀家が旦那寺にするように、お布施は何かの反対給付としてするものではありません。ただ、自分の修行のために、自分の功德のために、そうすることそのためのために、何の利得も期待しないで、ただひたすらそうするだけのものなのです。そうすることが、決して何かの手段ではないのです。そうすることそのことが目的なのです。

この、お布施が反対給付を期待したものであってはならないことを分らせるための有名なエピソードがあります。それは、達磨大師（禅宗の開祖）が、時の帝（梁の武帝）の「私は寺を造り、写経をし、僧を養ってきた。どれほどの功德があるうか」とのお尋ねに、「無功德」と答えた、というものです。これは、そうすることそのことが功德であって、その他に功德があるわけではない、ということに分らせるためのものです。つまり、そうすることそのことが、その人の人格を高からしめている

のであって、人が認めようが、認めまいが、そうなので  
す。仏さまは、そのことをちゃんと知っていて下さるの  
です。ですから、「そうさせて頂いてありがたい」ので  
す。

社会は、自分だけで生きているではありません。第  
一この世に生まれてくるのも、両親のお蔭なのです。自  
分が存在するのは、直接的には両親ですが、両親が存在  
するには、その両親がいなければなりません。こうして  
両親、両親と先祖をたどって行きますと、三十代さかの  
ぼっただけで百億近い祖先を持つことになるのです（二  
の三十乗という計算になります）。それだけ多くの人、  
つまり社会の人が、何かの因縁で結びついたお蔭で、い  
ま死なないで生きている自分があるのです。つまり、先  
祖や社会のお蔭なのです。

このように、基本的にはお布施をするには、自分がこ  
の世に存在するのは、自分のはからいを越えて、社会の  
多くの人のお蔭をこうむっている。それは、私たち人間  
の力を越えた仏さま・神さまのお蔭をうけていることと  
同じなのだ。だから、自分も社会のため、仏さまや神さ  
まのために何かをさせて頂く。そういった謙虚な気持ち  
を持つ必要があるように思うのです。そうすれば、「さ  
せて頂いてありがたい」という気持ちにもなれるわけな

のです。

これまで述べてきました財施は、自分の命の次に大切  
な財産を人さまに、何の反対給付もなく差し上げるわけ  
ですが、それは財産という自分への執われを捨てること  
の一つの現れとして、宗教ではとても大切にされていま  
す。本当のところ、財産にこだわっていても、いずれそ  
のうちに財産は無くなってしまうものなのです。おこれ  
る平家は久しからずです。栄枯盛衰は世のならいです。  
財産に固執しては決して幸せはやってきません。大  
切なことは、今の自分がこのうえない幸せを味わうこと  
なのです。何があっても崩れ去らない幸せを自分の、こ  
の他ならぬ自分の心の中に作り出すことなのです。そう  
する契機を持つものとして布施は、もう一つの意味を持  
っていると思うのです。

ところで、これまでは、お金や物のお布施とそれが反  
対給付を何も期待してはならないものであることを述べ  
て来ましたが、お布施するものは何も物だけに限られて  
はいません。物をお布施することは財施（ざいせ）とい  
いますが、その他にも、坊主が信者に教えを説く、法施  
（ほうせ）と一切の衆生に恐怖の念を除く無畏施（むい  
せ）とがあります。これらを三施と呼んでいます。

財施は、このように自己への執われを捨てるための一

つの修行なのですが、人さまにあげる財産の無い人にはこのお布施はできません。でも心配はいりません。無くてもできるお布施が、三施の他にもあるのです。

それは、「無財の七施」と呼ばれる、誰にでも出来る次のお布施です。眼施（げんせ）、和顔施（わげんせ）、言辞施（ごんじせ）、身施（しんせ）、心施（しんせ）、床座施（しょうざせ）、房舎施（ぼうしゃせ）。

この中の、和顔施と言辞施は来月号の「二、いつも和顔愛語を欠かさないこと」に、まさしくあたっていますし、眼施も関連がありますので、来月号で解説したいと思います。

それでは残りのうち、まず身施から説明していきま。文字通りですと身体をお布施するわけですから、心臓とか腎臓とか肝臓のような最近はやりの内臓や身体の一部を人さまに提供して、移植することだと思われるかもしれませんが、そうではないのです。

そうではなくて、自分の身体を動かして他者にお布施をすることです。おおげさに言いますと、身体を動かして奉仕活動することです。いまの言葉ですと、ボランティア活動することです。あるいは、もっと身近なことと言えますと、骨おしみしないで気軽に動くことです。

どんなささいなことでもよい、人が喜ぶようなことを自分の出来る範囲で、身体を動かしてすることです。お茶をいれてあげる。何かをとってあげる。そつとはき物をそろえてあげる。わが家の前の道路や溝をきれいに掃除してあげる。そつと何かに手をかしてあげる。やるうと思えばいくらでもあると思います。

次に、心施に移ります。これは、これまで何回となく言つて来ました「人の心を感じる心」を持つことに通じるものです。つまり、誰にたいしてもやさしい思いやりやいつくしみの心を持つことです。だれにも親切にすることです。

人は自分の心の動きを身体を通じて表現します。「目は口ほどに物を言う」ということわざがありますように、言葉ではなくて顔の表情や身体の表現を通じて、私たちは自分の心の動きを現したり、人の心を感じたりしています。そこに人と人との心の通じ合いがあります。人の心が満たされるのは、結局はそうした人と心が通じ合った時なのです。自分が分かってもらえた時なのです。誰でもがあの人とは心が通じると感じてもらえる人になるためには、この心施を心掛ける必要があります。

次に、床座施ですが、先ずこの見慣れない床座という言葉の意味を見てみたいと思います。この言葉は、布

団や枕などの寝具を意味しています。ですから、このお布施は多分修行者が托鉢しながら、修行や布教の旅をするときに、寝泊まりする夜具を進んで貸すことを意味しているのだと思うのです。次の 房舎施は、房舎が建物を意味しますから、建物を同様に進んで宿にお貸しすることを意味しているのではないかと思います。ですから、これら二つを合わせて、人におしみなく物を貸してあげて、人を勧めていっているのではないかと思うのです。

今は、お四国巡りしても、無料で宿を貸してくれるお寺はないようですが、昔はお金がなければ、お寺でただで泊まれたのではないかと思えます。それだけ、巡る人も豊かになったのかもしれないませんが、お寺ももうけ主義になって、僧侶たちの寝泊まりする庫裏ばかりが立派になっていきます。これまた、坊主自らがこのお布施を実行していないことになりました。

いま、日本は物が豊かになり、何でもわが家にあると思います。一昔まえまでは一つの集落が共同で利用する物もあつたと思えますし、また、道具のような高価な物ではなく、味噌や醤油のような日常の食品でもちよつと隣から借りることもあつたと思うのです。

ところが、いまやそういう共同体意識をいやがおうでも意識させるような、物の貸し借りや、ここでは直接関

係ありませんが、労働の貸し借りないし共同作業も殆どなくなり、人の心のつながりが、豊かさの故にそれだけ希薄になって来たのではないかと思うのです。人はどうでもいい。自分だけちゃんとしていけばそれでいいんだ、という悪しきヨーロッパの個人主義思想が、いま日本にもはびこつて来ているように思えて仕方ありません。少なくとも、私のいま住んでいるこの山城町だけはそうならないように、努力して行きたいと思えます。

人は、人の中で生まれて、人の中で育ち、人の中で生きて、人の中で死んで行きます。人との心のつながりがないところに、真の幸せはありません。どこまでも人には、お布施の心で接し、自分は傷ついても、人は傷つけない人間にならうではありませんか。

そんなことを言われても、自分が傷つけば、悩んでしまふ。すると表題の「ひとで悩みたくない人は」の趣旨に反するのではないか。そう反論されるかも知れませんが、でも、傷ついたからといって報復をすれば、それは闘争へと発展して行きます。和顔には和顔、愛語には愛語が返りますが、非難には非難、暴力には暴力がこだまのように返ってきます。そうしますと、結局悩みは益々大きくなって行くばかりなのです。どうか、人にはお布施の心で、どこまでも接して行くことではありませんか。

## 自作詩短歌等選

### 宗教の理屈

宗教の  
理屈知る人  
多けれど  
体得する人  
少なかりけり

宗教の  
理屈知れども  
修なくば  
自ら縛る  
執らわれとなる

宗教の  
理屈言えても  
日常の  
行動いつも  
間違いおりぬ

人生は

評論家では

済まされぬ

「ゆう」だけなのは

お風呂屋さんよ

### 自然と人間

人間は万物の霊長

人間に天敵はない

そう思つて自然の

物や生命を

思うままに

消費していたら

いつかきつと

自然自身が

天敵となる

### 善悪

多き人

おのが立場に

執らわれて

ひとの善悪

評すれど

おのが善悪

気付かざりけり

世の中の

多くの人は

自らの

執らわれ映し

何人をも

善人となし

悪人となす

善き人が

見えて来るよう

日頃から

心のまなこ

磨くなら

おのが善悪

気付くときも来ん

### 感じる心二つ

人の心を

感じる心

生かされて生きる喜びを

感じる心

私はこの二つの

感じる心を

何よりも

大切にしたい

## 私とあなたは同じ

真の平和と弱者の開放は  
やって来ない

私と

その輝きの  
何と

あなたが

素晴らしきことよ  
でも

別々の異なる

**いのちの輝き**

人間であることは

それがわかるのは  
人間だけ

よくわかる

いのちは

**人と仏性**

でも

輝いている

だから

物と生命は

私と

全ての  
いのちが  
輝いている

全ての輝きを  
失わせないよう

そのまま  
すべてが

あなたが

私たち人間で  
守つていこう

仏

平等・一味・無二・無別

物の

**生きる喜び**

人間は

であることを  
分かることは

いのちも  
生き物の

自分で

こころのあかを  
落とした人だけが

とても難しい

いのちも

生きていると思う喜びは  
嘘の喜び

仏

でも

人の  
いのちも

生かされて

それが分からなければ

みんな

生きていると思う喜びは

世の中に

みんな  
輝いている

真の喜び

# 自作随筆選

## はじめ

人間は、自律して生活しています。いちいち他人から、日常の行動を指図されなくても、自分の持っている価値判断の基準に照らして、社会的に期待されている、あるいは、少なくとも是認される行動をしています。その価値判断の基準は、法律であったり、道徳であったり、人倫であったり、「人の心を感じる心」であったりするわけです。

ですから、「社会的に」という意味も、社会の単位の大きさによって異なることになります。小は夫婦、親子、それらの複合した家庭から、大は国家、世界全体までいろいろな単位があります。そうした単位の期待であり是認であるわけです。

また、そうした基準は、人が生まれて育つ、成長過程で形成されて来ます。家庭での養育、学校での教育、地域社会や職域での規制、など様々な社会的接触とそこでの期待や要請を通じて形成されてくるのです。

ですから、もし実際に自律できていず、家族の構成員や世間から期待されない行動をしたり、非難されるよう

な行動をする人があるとすれば、それは成長の過程で価値判断の基準が形成されにくかったことを意味しています。なぜ、そうなるのでしょうか。

そのことをみる前に、こうした基準を形成する心理的機能が、心理学の言葉で言えば、情動・感情機能と自我・人格機能にあることを見ておきたいと思います。

まず、各言葉の定義を述べてみます。情動とは悲しいとか嬉しいとかこれされが欲しいとかいう、自分の心の動きです。感情とはひとの情動を感じる心です。自我とは自分の生き方を追求し、実現しようとする心です。人格とは社会の期待や要請に従おうとする心のことです。人間はこれらの各機能の統合の中で生きています。

こう見て来ますと、社会的な価値判断の基準が形成されるのは、主に感情と人格の機能によることがお分かりだと思えます。その中でも、「はじめ」と呼べるものは、特に人格の機能に関係があります。人格者であるためには、自分のエゴを離れて、いま社会的に自分に期待されているのは、どんな行動なのか、はっきりと意識でき、それが実行出来る必要があります。この基礎には勿論、人の心を感じる心がなければなりません。

「はじめ」がつけられるように、また人の心が感じられるように、自分の心を磨いて行きましょう。

## より美しく老いるためには

人間は、誰にでも命に限りがあり、生まれたからには、老いてやがて死んで行かなければなりません。どんなに立身出世しようが、世界一の大金持ちになろうが、世界中を支配するほどの強大な権力を握っていようが、やがて老いて、そして死んでいかなければならないのです。でも、そういう人ほどが、老いや死を迎えたくないと思っ

て、あがくようですが。私は、人生では老年期が一番大切だと思っています。人生の総決算が老年期だと思うからです。一生の中には色々なことが起こったでしょう。苦勞の多い時期もあつたでしょうし、樂が出来たときもあつたでしょう。

でも、中年から熟年、老年へと入ってきた今、どんな暮らしをされているでしょうか。たいした労働もせず、年金などの社会保障や貯蓄、あるいは子供からの仕送りなどで、毎日、テレビや新聞を見たり、美味しいものを食べたりして、平々凡々で樂な毎日を暮らしている、でも芯から心は満たされていない、といった生活をしている方もあるかもしれません。あるいはまた、自分の生きる道を自覚して、そのことに、苦しいけれどもひたすら打ち込んでいて、とても充実感を感じながら生活してい

る方もあるでしょう。

では、どうすれば美しい老いを迎えることができるのでしょうか。それを考えるには先ず、美しいとはどんなことなのかを考えておく必要があるように思うのです。

ところで、人は、仏さまや神さまからそれぞれの個性を持つてこの世に、ただ「贈られて」生まれて来ます。自分がこういう人間に生まれようと思つて生まれてくる人は誰もいません。気付いた時には、自分が、親をはじめ家族が、環境が、そこに存在していたのです。それは私は「業」と呼んでいます。そして、だれもその業を避けることは出来ないのです。

ですから、もし美しさを美人コンテストのような身体的な美しさだとしますと、美しく老いることは、容貌やスタイルの美しくない方には無理なことになってしまいます。それは、自分の努力ではどうすることも出来ないことだからです。もし出来るとしたら、整形手術をする以外にありませんが、それだつて限界があります。白人を黒人にすることはできませんし、身長を変えることも足の大きさや太さを変えることも出来ません。もし、それをカモフラージュするには、お金に物を言わせて、やたらに宝石や衣服で身を飾りたてることしかありません。でも、先日もテレビに映っていたのですが、ポルセ

という高い西ドイツ製のスポーツカーに乗った高年のご婦人は、指三本に指より大きな宝石を三つも付けていました。でもそれは、いかにも不似合いで、成り上がりのごてごて趣味にみえました。美しく老いるどころか、ますます心の貧しさや醜さを感じさせるものでした。

だとしますと、美しさは身体ではなくて、個性のもう一つの特性である心とか精神に求めなければなりません。実は、あり難いことに、心は磨いてやれば、磨いただけ、美しい光が出てくるものなのです。美しく、美しく輝いて来るものなのです。そしてその心の輝きは、やがて表情の輝きとなって現れて来ます。どんな宝石よりも美しい輝きとなって表情に現れてくるものなのです。

前述しましたように、人間は誰でも業を背負って生まれてきます。もし、その業がその人の一生を左右してしまふのであれば、人間の主体性はどこにもありません。先験的な業に支配された生を、ただ機械的に生きる以外に生きようがなくなります。もしそうだったら、余りにも人間がみじめに思えてきます。

でもあり難いことに、人間には努力次第でその業から逃れる道が用意されているのです。それは、前に述べましたように、心を磨くことなのです。誰でもが業を持って生まれて来ていることに気付いて、ひたすら心を磨く

のです。そうしたひたすらな精進を重ねて行きますと、いつかは人間は業から開放されて、絶対の幸福が心に満ちあふれて来るようになるのです。そして、それは表情へと現れ出てきます。もし、誰かがそうした人のそばにに居ますと、その人の心もなごんで来て、幸せな気持ちになつていけるのです。

あり難いことには、歳をとつて来ますと、自由な時間がたくさん出来てきます。家庭での役割がだんだんなくなり、自分だけの人生を送れるようになって来るといふわけです。ですから、心を磨こうと思えば、そうする時間が多く持てるようになると思つたのです。

では、どうすれば心は磨けるのでしょうか。それは、磨くという言葉からもお分かりの通り、実際に身体を使って実践しなければなりません。つまり、世に言う修行がいろいろあります。私は、歳をとつて来たら誰でもが修行すべきではないかと思つていられるのです。具体的な修行法ですが、それは、ヨーガであり、座禅であり、瞑想であり、念仏であり、お祈りであり、水行であり、写経であり、読経であるのです。

どれも結構です。毎日ひたすらお続け下さい。知らないうちに「たましい」が救われ、美しく老いて、周囲の皆を幸せにし、そして、安心して死んで行けます。

## 真言宗在家勤行式（18）

「光明真言」

「おんあぼきやべいろしゃのうまかぼだらまにはんどまじんばらはらばりたやうん」。

オーン（＝帰命したてまつる）。真実にして空しからざる遍照（＝大日如来）の大印よ、宝珠と蓮華と光明（清浄なる本性と慈悲と智慧）との徳あるものよ、転ぜしめ給え、フーム（＝この真言を唱えれば、菩提心を発し、修行して、成仏することを得る。地獄を破って浄土となすことを得る）。

真言そのものが何なのかにつきましては、既に何度か述べて来ましたので、そこをご覧下さい。例えば、第一巻七月号、第二巻十月号、第三巻一月号などです。

（また、仏さまそのものについて既に解説の終わっております十三仏の真言の解説は、省略させて頂きます。）

さて、この真言は、不空大灌頂光真言（ふくうだいかんじょうこうしんごん）、略して光言（こうごん）とも呼ばれます。勤行式にありますように二十一回または百回または千回唱えることになっていきます。このことから

も分かりますように、真言宗では最も大切な、唱えることによる功德の多い真言とされています。

この真言のことが述べてあるお経などによりますと、この真言は、大日如来の真言であるとともに、また一切の諸仏・菩薩全てに語り掛ける「総呪」とされています。これを、受持（じゅじ）信じて心に念じ、かた時もおろそかにしないことし、誦誦すれば、無量、無辺の功德があり、わずかに二遍あるいは、三遍あるいは、七遍聞くだけで、一切の罪障を除き滅することが出来るのです。また、この真言百八遍を唱えて加持した土砂を、死屍または墓地にかければ、たちどころに生前に犯したどんな重罪も除かれ、西方極楽浄土に往き、菩提が得られるとされています。

ところで、始めにこの真言の日本語をあげておきましたが、その中に「転ぜしめ給え」というのがありました。多分、意味がとれないと思いますので、解説しておきます。それは、この真言を誦（じゅ）すれば、迷いを転じて、悟りを開き、凡聖不二、神通自在の身になることが出来る、というところから来ています。凡聖不二、神通自在とは、われわれ凡人が聖人（仏）と一体となり、神通力が自在になるということです。特に、人の心を見通す、他心通が一番に授かります。

後記

一、一月二十八日（金）の夜から二十九日（土）の朝にかけて、この冬一番の雪が降りました。二十センチから二十五センチは積もっていたと思います。いま（二月三日）も、まだ庭や畑には五〜十センチ程度残っています。国道三十二号線まで下りますと、始めから全く積もっていません。夏、ここが涼しいわけが分かります。

二、遅ればせながら、梅と柿の木に何年とかがつてからみついた、つたや他の木を取り除いてやり、茂ったところをせんていしてやりました。梅四〜五本、柿七〜八本はあるでしょうか。昨年、柿は一つもありませんでした。今年は、なし、梅も数えるほどしかありませんでした。今年は、なつてくれればいいのですが。

三、先日、あの有名なギリシヤの哲学者、ソクラテスのことを勉強しました。あまりの偉さに、感動を覚えしました。また、一つすばらしい出会いをしたと感じています。残っている幾つかの胸像を見ますと、ひどく、ぶおとこなのも、共感を覚えます?!。まあ、それはどうでもいいことなのですが、とにかく完全に解脱していて、ここにも一人、「仏」がいたのかと思つたほどです。ギリシヤはヨーロッパだと思つていたのに、とても東洋的な

です。そのことが気になり、後で、ギリシヤの歴史を調べてみましたら、やはり、インドとギリシヤは同じ民族が紀元前二千年頃分かれて移住したようです。実は、これも調べてみて驚いたのですが、釈尊とソクラテスは殆ど同じ頃生まれているのです。釈尊は紀元前四六三年、ソクラテスは同四七〇年の生まれで、ソクラテスが七歳年上なだけです。お互いに知り合いではなかつたと思いますが、それにしても、よく似ているのに驚きます。西洋にもこんなすばらしい思想があつたのにと残念です。

四、毎月、八日は心光寺の縁日です。十時からです。一時間は修法を、あと一時間はお話しをさせて頂きます。

月刊 こころのとも	平成四年二月八日
第三卷 二月号 (通巻 二十六号)	〒779 53 徳島県三好郡山城町国政八三四 清心者寺院 心光寺  (沙門) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small>
心光寺 口座番号 徳島9 53708	本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院

